

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑦

せせらぎの音、山々を渡る風、新緑の息吹、彩りを深める紅葉、静寂さを際立たせる白銀の世界——これら全てが五葉山麓の恵みである。

私は五葉山の麓、大船渡市日頃市町に農家の三男として生まれたが、兄二人が戦死したため盛農学校を卒業してすぐに家業を継ぐこととなった。昭和三十年代後半、エネルギー革命によって炭焼きが下火となり、林材業を起こした。

自然保護について真剣に考える直接的な動機となったのは、昭和五十三年に県立自然公園管理人となつてからである。四月から十月までの七カ月間、二日に一回は山に向かう。スコップ、カッチャ、カマを持ってパトロールする。傷んだ登山道を整え、歩きやすくするためにある。

そして登山者には必ず声をかける。時には目の前でゴミを捨てる人もいるが、私はそのゴミをその人の前で黙って拾う。その登山者の良心を信頼してである。

私たちが地域の人々の営みの中に地域での生き方を知り、豊かな自然に抱かれることによって情操を養っていく。見えな

いもの中からも尊いものを知らず知らずのうちに感じ取り、体得している。自然とのかかわりもそうで、人と接すれば接するほど親しみがわくように、山へも足を運べば運ぶほど愛着が深まっていく。

私が一番気に入っている

場所がある。そこは置石から檜山にかけての二帯、三町歩にわたるブナ、ミズナラの樹林地帯で、直径は優に一畝は超す。手つかずの森、この原生林に佇んでいると心が和み、心が洗われる。

「森はすべからく人間のあるさ」とあり、すべのふるさとであり、山に戻した。ある時、山を取り戻そうという運動でもある。

私の中に生き続ける「ピー太」

大船渡市日頃市町

伊藤 悦次

「の源」と考え、平成七年に「五葉山炭水木(たんすいぼく)の会」を設立した。炭を焼き、水車を回し、樹木を知る。山や森を通して先人たちの営みの中から、人情味溢れる文化が創られてきたことを顧みてのことである。

中で傷つきやせ細った子ジカを見た。孫たちが飼育の時に名付けたあのの朝方、座敷の寝床でバ

「ピー太」だった。行政機関の許可を得、「ピー太」の飼育が始まった。シカの平均寿命は約四歳、最長でメスは約十六歳、オスは約十二歳と言われる。「ピー太」の成長記録として、毎年春先に落とす角を保存してきた。角の枝振りも年を追うごとに大きくなり立派になっていった。角は十九を数えた。晩年は角の勢いも衰え、エサも食べ

タバタ走り回る音がした。胸騒ぎがし、急いで「ピー太」の小屋へ駆け込んだ。抱きかかえると「ピー太」のぬくもりが伝わってきた。いましがた逝ってしまったのだ。「ピー太」との出合いから二十年。それは家族みんなで愛情を注いだ年月でもあった。ぬくもりの中にさまざまな思いがわき上がってくる。「ピー太」から多くのことを教えられ、自分自身の成長もあったように思う。「ピー太」は今なお私の

【執筆者プロフィール】

大船渡市日頃市町在住。七十八歳。昭和五十三年から平成七年までの十七年間、岩手県立自然公園管理員。昭和六十三年、環境庁の国立自然公園保護指導員。実直さ、誠実さが伊藤さんの魅力。

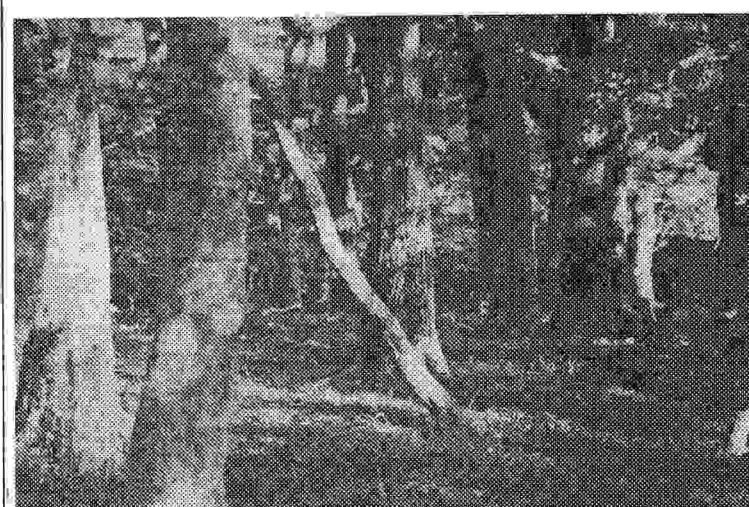
「伊藤さんみたいな管理員を見たことがない」と保護指導員仲間。「ピー太」の二十年間の共生記録が、大船渡市博物館に展示されている。

ピー太

今日忘れかけている思いやり、いたわり、痛みを寄り添う気持ちと呼び起こし、本来人が持っている他者への思いをいたす心、いわば心の豊かさ



ピー太の角と筆者



ブナやミズナラの樹林。直径は1畝を優に超える。手つかずの原生林で「一番気に入っている」場所